

Julius Cæsar 試論

— Brutus を中心として —

峯 田 英 作

Shakespeare はローマを背景にして五つの作品をかいている。即ち、共和制期を扱った *The Rape of Lucrece*, *Coriolanus*, *Julius Cæsar*, *Antony and Cleopatra* と、帝制期を描いた *Titus Andronicus* の五篇である。そのうち、*Julius Cæsar* は、詩人が Plutarch に取材した最初の劇であり、一連の「史劇」に手を染めた時期に訣別して円熟期に足を踏み入れたと考えられる最初を飾る悲劇でもあって、Shakespeare が悲劇の手法を確立したのもこの作品に於いてであると評されている。⁽¹⁾が、この記念すべき悲劇に纏わる論議は華やかで、恰かも無限に連る煙霧にひとしいのだが、百出の論議を臆面もなく簡潔に論断すれば二つに大別できるようだ。即ち、一つは窮局的には主題を志向する論議であり、他は詩劇の宿命とも言える措辞の考察とも言えよう。何れの方法をとろうと、結局は *Julius Cæsar* 劇の演劇性と文学性を論ずるものでなければならぬであろう。拙稿では、できるだけ Brutus に焦点を合せてこの劇を考察することにする。

(1)

最初に Plutarch との関係述べておこう。Plutarch は Ovidius や Seneca とならんで Shakespeare が最も親しんだ古典作家の一人と言えるのだが、Plutarch を十六世紀ヨーロッパに紹介したのは周知の如く Amyot であって、詩人が Plutarch の世界に触れたのは North の重訳を通してである。North の同書を手にして Shakespeare が窃に北叟笑んだであろう姿態は、冷静な常識家 Dryden が Plutarch に覚えた仄かな微笑みと淡い交誼を結んでいるのではあるまいか。とは言え、詩人に作劇の衝動をかきたであろう要因の一つに、訳者 North の筆が斉した斬新性を挙げるとしても牽強附会の誹は免れよう。言うなれば North

(1) Cf. W. Farnham: *Shakespeare's Tragic Frontier* (1950), p. 3.

の存在価値もここにある。いみじくも Spencer が述べているように、彼は辞句の翻訳に胡坐することなく、多少の逸脱はあるにしろ奔放自在の筆尖を駆使して *Parallel Lives of the Greek and Romns* に reality を加えたと言ようから。つまり、

…When all his limitations have been exposed, North remains an astonishingly successful translator, able to interest the reader by the directness of his language and the rough strength of his narrative⁽²⁾…

と言うことになるので、同書が Shakespeare のみならずエリザ朝更にはジェームズ朝と版を重ね多くの読者をかち得たのも、North の独得な訳業に負うところ大であったと言える。

広い読者層を維持できた要因と言えば、North の翻訳態度もさること乍ら更に二つの事実を加えねばなるまい。即ち一つは、Plutarch の *Lives* が Holinshed 同様頗る独得な体裁の通俗史で馴染みやすかったばかりか、何よりも文学作品として傑出していたことである。Plutarch の価値は歴史学的な意義よりも文学性に於いて重要である。Plutarch が意図したのは歴史が現実的にどうであったかという歴史学的な映像の表出にあつたのではない。ギリシヤ人とローマ人を対比しながら「英雄」の世界をギリシヤ的徳性の讃歌で描写することにあつた。このような特質が人気をよぶ要因となつたのではあるが、いま一つは、時代の関心が歴史に向けられて現代に生きる教訓として歴史が重要な役割をつとめていたことに由来する。エリザ朝に夥しい史劇が量産されたのも、絶対君主政治の確立という現実的意図のほかに、史劇を支えるだけの関心があつたからに他ならない。このような時代の風汐にあつて、とりわけローマの世界は諸種の教訓を包蔵する過去として当時の人々には映つたはずである。

North の筆が齊した vigour, Plutarch の *Lives* 固有の親近性と文学性、そして時代の歴史によせる関心等が相呼応して Plutarch はエリザ朝に親しまれたと考えられる。が、このような特性や風汐も直接的には劇の成功を約束するものではない。劇 *Julius Cæsar* が、当時 “one of the most popular plays⁽³⁾” になり得たのは、Plutarch の記録から具体的な人間を再構成してエリザ朝に蘇らせ、「つねに世界を意味する板」の上にそれを³おいた詩人の力量以外の何物でもない。とすれば、詩人は素材をいかように扱つたのであろうか。確かに多くの評家によ

(2) T. J. B. Spencer: *Shakespeare's Plutarch* (1964), pp. 9-10.

(3) H. H. Furness: *The Tragedie of Julius Caesar* (1913), p. 437. Furness 自身の考察ではなく、Schelling の言として述べられている。

って指摘されているように、*Julius Cæsar* の何れの事件をとりあげても Plutarch の描いていないものはないと言えようし、時には片言隻語にいたるまで North を踏襲していると思われるものがある。そればかりか、更には North の誤訳が Shakespeare に継承されるという愛嬌のある皮肉まで加っている。些細な例を一つあげるなら、North の陥穽は意外な所に設けられていたと言えよう。即ち、“On this side of Tiber” がそれである。Amyot の誤訳が皮肉にも North の誤訳を生み、その誤謬が詩人に伝承されようとは。Plutarch によれば “on the other side of the river (πέρον του ποταμού)” である。だが、ここで留意しておきたいのは、MacCulum が提言しているように Shakespeare の Plutarch に対する「負債を過大視する傾向」⁽⁴⁾ が禍いして、劇 *Julius Cæsar* の評価を誤るのではなからうかと懸念されることがある。

もとより、歴史劇と言っても総体としての歴史的眞實は尊重されなければならない。例えば、ローマに於いては Cæsar 登極の可能性は充分にあった。民衆が「王」と歓声を挙げた時、彼らは Cæsar の雄姿を仰ぎ見ていたし、王冠を捧げた Antony の眼差しは Cæsar に向けられていた。このような Cæsar 殺害に発展していく Cæsar 登極の状況、更には Cæsar の悲劇的死については劇においても変更できない。だから筋の提示する歴史の動きは歴史的事実と一致しなければならないし、Shakespeare の享受し得る虚構の自由は歴史的事実としての総体そのものにはない。詩人の操作し得る自由には自ら限界があったと言えよう。North を通して間接的に構築された詩人の image は、成る程自己の直接的体験による image 程の強靱さはなかったろうが、時代的雰囲気等の細部の描写においては、虚構の自由が許される。譬えば、“Casca by the sleeve” や “he plucked me ope his doublet” は、明かにエリザ朝人の服装を想定しての台詞であるし、また、“the high east/Stand, as the Capitol, directly here” も歴史上審かでない点、The Globe Theatre を念頭に於いての事であろうし、“he knotty oks” にしても、寧ろイギリス人に馴染み深い光景であろう。“Peace! count the clock” に到っては駄言を要しない。reality を思念する詩人の思考がこれらの語詞を生んだのか、或いは無意識の裡になされた誤謬であるのかは、

(4) M. W. MacCallum: *Shakespeare's Roman Plays and Their Background* (1910), p. 164. 尚、N. Delius も彼の卓れた論文 “*Shakespeare's Julius Cæsar und sein Quellen in Plutarch*” で同様な見解を示していると言われるが、筆者は未見である。

臆測の域を出ないとしても、恐らくは詩人の奔放な筆が斉した意識的産物ではなからうか。勿論、詩性を尚ぶ余り明かに意識的に修正したと断言できる語詞もある。一例を挙げると、23ヵ所の刃傷を負って斃れた筈の Cæsar を、Shakespeare は “three and thirty” と詠って妙味を出している。以上挙げた諸例は何れも、Caesar の悲劇的死亡という歴史的真理を歪曲するものではなく、歴史劇としての真実性を損うものでもない。要するに、筆者が述べたいのは、*Julius Cæsar* の筋の展開と *Lives* の述べる歴史の流動との類似を、直ちに Shakespeare の Plutarch に対する負債一般論にすり変えるのは危険であって、寧ろ Plutarch の説く歴史的総体を詩人が如何様に形象化し、Cæsar 殺害の事件をどのように提示し捉えたかが問題にされねばならぬという事につきる。話題はそれるが、*Discoveries* に唱われた悲劇観の結実とも思われる *Sejanus*⁽⁵⁾ は、Jonson の dramaturgy を表出していて興味深いが、それよりも Jonson と Shakespeare の歴史劇に対する対照的な作劇法を示す恰好の作品と考えられる。それはさておき上述の問題にもどって、Shakespeare の描いた Brutus について Plutarch と比較してみよう。

Plutarch によれば、Brutus は廉直高潔な人柄で人望厚く、徒党が Cæsar 殺害の陰謀を実行するに際して何よりも彼の人物を必要とした、と述べられている。また彼自身純粋な自由を口にした点、Antony の殺害を許さなかった点、何れも Shakespeare の描いた Brutus と類似している。だからと言って徒らに Plutarch を模写したのではない。周知の如く、Shakespeare の Brutus は高潔な殉教者を思わせる孤高の志士であると共に、自負心の強い理想主義として描かれている。だから高潔性を損う属性は悉く剥ぎとられ、大自然すら「これこそ人間」と拍手を贈る人間として登場する。Plutarch が教えてくれる不潔な人間の臭味は Shakespeare の Brutus からは想像もできない。例えば、Brutus と Cassius との獵官運動にしても、またそれに伴う両人の仲違いも、更には Pompeus 敗けるとみるや Caesar に仕える Brutus の巧智も、そしてまた権力によせる人間 Brutus の野心にしても、これらは意識的に葬りさらされている。詩人は理想主義という単色で入念に Brutus 像を描くことに専念したようだ。そればかりか、初期の「史劇」では、

(5) Jonson この作品は *Discoveries* に認められる彼の悲劇観を示す作品であろう。彼は Plutarch によらず Tacitus などの正史によって、原典の史実を忠実に細大もらさず述べることによって、壮嚴な世界を描こうとした。その結果については多言を要しまい。

Cæsar 殺害の下手人として Brutus は侮蔑されているのだが、Shakespeare¹はこの見解をも *Julius Cæsar* では放棄しているようだ。更には、Plutarch には比較的簡単に述べてある Brutus の名分、即ち、ローマの「自由・解放」という使命感を、詩人は Brutus の存在理由として強烈に描いている。これを裏返していうならば、純粹無垢なこの使命感に悲壮なまでに捉われて、理想主義者 Brutus が破滅するところに格調の高い悲劇があるし、詩人の叡知の所産 Brutus の世界がある。成る程、Shakespeare と Plutarch との間には、Brutus についていくつかの類似性はあるのだが、劇 *Julius Cæsar* 全体から把握される Brutus は Plutarch のそれとは異質なものであろう。Plutarch の描く Cæsar 殺害の歴史的事実を、詩人は Brutus という人間に託して帰納化し、「現実の」不安と矛盾を投影して「現在進行形」に変形したと言えよう。劇 *Julius Cæsar* における Brutus の思惑と行動は、悉く現実と離反する。この離反が Brutus の迷妄であり悲劇的運命の胚胎であり乍ら、それに気付かぬ所に Brutus の矛盾があり孤高性が生きて来る。更にこのような Brutus 像を支えるものに、詩人の巧緻な語詞が描く irony がある。以下これらの諸点について述べよう。

(2)

Brutus の犯した最初の而も決定的な誤謬は、殺さなければならなくなるだろうという曖昧な思惑に導かれた “It must be by his death” という明快な論理にある。殺さなければならぬであろうから殺すより他に方法がない、という論理の裏面では、殺さなくてもよいのかも知れないという迷いが生きている。そればかりか、「現在の彼に対してはどうも十分な理由がない」し、憎む理由すら見当たらない。登極の暁には性格が変り暴君となるのかも知れないが、曾て Cæsar が「理性よりも感情によって左右された例を見たこともない。」迷いはてた Brutus は、

think him as a serpent's egg

Which, hatch'd, would, as his hind, grow mischievous,

And kill him in the shell. (II. i. 32-34)

と、躊躇いながらも結ぶ。結んだ瞬間、独白の冒頭で口吟んだ “It must be by his death” という不安な台詞は、不動の真理として蘇り断固とした決心に変わる。「ローマは…」と重大な叙述がふせられた煽動の書状にも、彼は平然として「一人の人間の前に服従すべきか」と、自ら補足してみせる。孤疑逡巡は霰散して、自信に充ちた Brutus は詠う、

O Rome, I make thee promise;
 If the redress will follow, thou receivest
 Thy full petition at the hand of Brutus! (II. i. 56-58)

Brutus が Cæsar の登極によせた危惧は、何時しか「一人の人間の前に服従すべき」最悪の事態として正当化され、Cæsar の死によってのみ自由は得られるとの信念となって自らをローマの救済者に譬える。Cæsar の死即解放という頑迷な図式に気付かぬ Brutus の姿が悲壮なのは、一つには彼がローマという共同体の救済を只管思念するからであり、いま一つは、彼の自発的な決意に基づいて行動をしその責任を自らに背負うところにある。私欲を追求する人間の破滅も、また自然的な決断を伴わない破局も、悲惨ではあっても悲壮とはなりえまい。Brutus の雄姿の影に不気味な影絵が躍動するのは、他ならぬ irony の伴奏があるからだ。例えば、真夜中に心中穏やかにならぬ Brutus が「わしもあんなに眠って困ると言われたいものだ」と、Lucius を羨み、

Since Cassius first did what me against Cæsar,
 I have not slept. (II. i. 61-62)

と眠られぬ身を嘆く時、不眠症の人間は危険だとさりげなく洩した Cæsar の科白が生きて来る。そして、不眠に悩み只管安眠を求める Brutus の邸に投げこまれた書状の文面が、また際立った irony でもある。

Brutus, thou sleeps't: awake, and see thyself.
 Shall Rome, &c. Speak, strike, redress!
 Brutus, thou sleeps't: awake! (II. i. 46-48)

Brutus は真夜中だというのに、異様な光茫の下でこの書状を読む——異様な光茫、それは Nicoll のいう “tragic irony” なのだが——⁽⁶⁾読み終えた Brutus が “O Rome, I make thee promise” と詠う勇壮な雰囲気とは裏腹に、“sleeps't” と “awake” という語詞が美事な irony となって心に迫る。更に Casca と Cassius は不吉な天変を委に語り——⁽⁷⁾内的予言——劇的效果を昂めていく。卓抜な詩人の筆が丹念に描く不気味な世界で、Brutus が自らの決意を固持して純粹

(6) Cf. A. Nicoll: *An Introduction to Dramatic Theory* 尚, G. G. Sedgewick の “*Of Irony Especially in Drama*” (1948) は広汎な資料を駆使しているが、特に一章及び二章が有益である。

(7) この劇に限らず超自然的要素は Sakespeare の作品に屢々看られる。超自然界を扱った *Tempest*, *Midsummer Night Dream* を除いても、*Hamlet*, *Macbeth*, *Richard III*, *Henry VI (pt. I)*, *The Winter's Tale*, *Cymbeline* 等があげられる。

至高の目的に進めば進む程彼は迷妄という袋小路に入っていく、彼の高潔性が浮彫りになる。

Brutus の最初の躓きは、彼が Cæsar の死をローマの自由と同意義に解釈した妄想にあるのだが、この過失が、徒党との結託という更に重大な過失を招く。Dowden は Brutus を Girondin に Cassius を Jacobian に譬えているが、⁽⁸⁾ Cæsar 殺害という同一の目的を有つ二人を評し得た巧みな比喻とはいえても、所詮二人の本質を表す比喻とはなるまい。Brutus は Cæsar を通してローマの自由を脅す暴君の姿を見詰めた。一方 Cassius は Cæsar を通して自己の自由を脅す危険な人間の姿を見た。Brutus が未来の不条理を懼れる時にも、Cassius は現実を「汚辱の時代」と見做した。Cassius の見たものが、自分より同等以下の人間 Cæsar であり Cæsar からの自由であるのに対して、Brutus は Cæsar の中に懼るべき Cæsar 精神を看取しここからの解放を求めた。本質的に異なる自由を標榜して Cassius と手を結んだ Brutus は、大きな過失を犯したと言えよう。Brutus はローマを愛し Cæsar を愛するが、Cassius は Cæsar に求められぬ人間愛を Brutus に求める。Sardis の陣営で二人の間に悶着が起る時にも、Cassius の訴えるのは人間的愛である。愛されん事を願う Cassius に対して、Brutus は頑迷な程激昂する。Cæsar を愛するが Cæsar 精神を憎むという Brutus の愛の世界には、友人であろうと不正を許容する余地はない。冷徹な理性家 Brutus が激しい私情をみせるのはこの場面だけである。(聽て Brutus の激怒もさめて二人の間に友情が復活する時、「滅多に笑いもしないし、笑えばまるで自分を嘲るようにしか笑わない」と評された Cassius が、呵々と笑うのもこの場だけであるのがいかにも対照的である。)

Cæsar doth bear me hard; but he loves Brutus;

If I were Brutus now and he were Cassius,

He should not humour me. (I. ii. 317-319)

と嘯く Cassius の狡計にのって徒党に組する Brutus の姿は、取りも直さず頑迷な理想主義者の肖像でもある。徒党が Brutus に求めたものは彼の高邁な人格、つまり罪惡すら美德に変える“alchemy”であった。——古来一度も成功した例のない alchemy である。だが徒党の期待に反して、Brutus が徒党に示したものは、常に徒党本来の姿に逆行する独得の理想主義的論理であった。Brutus

(8) E. Dowden: *Shakespeare; A Critical Study of his Mind and Art* (1963), p.283.

の徒党への参加が彼の過失であれば、またそれは同時に徒党の過失でもあった。「人の行為などは奥の奥まで見抜いてしまう」と評される Cassius が、

Let Antony and Cæsar fall together (II. i. 161)

と提案する時も、“the spirit of Cæsar” に蹶起するのだからとして Brutus によって却下される。更に、Antony を「Cæsar の手足に過ぎぬ」と見做す Brutus は、Cassius が、

You know what you do: do not consent

That Antony speak in his funeral:

Know how much the people may be moved

By that which he will utter? (III. i. 232-235)

と注意を促すにも拘らず、“It shall advantage more than do us wrong” と応じて Antony に Cæsar 弔いの演説を許す。徒党の悲劇的運命は悉く Brutus によって助長され、徒党本来の歩みとは常に異なる方向に引擡られていく。そればかりか、Brutus の徒党における支配権が皮肉な相を呈している。Brutus は独裁主義の齎す不自由からの解放を思念し乍ら、彼の徒党における支配権は常に絶対的力を有ち、彼が徒党に名を列ねてから Philippi の野に落命するまで微動だにしない。徒党における Brutus の関係は、恰かも国家における君主の関係にも似ている。これは、詩人の筆が意識的に描いた Brutus の自家撞着であろう。彼は Cicero を評して、

he will never follow any thing

That other men begin (II. i. 151-152)

と述べ Cicero の加盟を斥けるのだが、他人の言を拒んで己の路を歩むのは、Cicero ならぬ Brutus 自身である。Brutus は Cicero を評しつつも自らの頑迷な姿を自らの口で描いていると言えよう。依怙地とも思われる Brutus の徒党における絶対的支配権については、既に述べたいくつかの例からも判断できるのだが、更に恰好な例を一つ加えておこう。

四幕三場の作戦の談議において Brutus は、

What do you think

Of marching to Philippi presently? (IV. iii. 196-197)

と Cassius の意見を求める。Cassius は反対して作戦の変更を提案するが、Brutus は決して自らの言を曲げようとはせず、結局 Cassius をして

Then, with your will, go on;

We'll along ourselves, and meet them at Phillippi. (IV. iii. 224-225) と言わしめるのである。Brutus が相談をもちかける時、形式は相談であろうとそれは常に最終決定を意味するし、Brutus が意見を述べる時、それは個人 Brutus の意見ではなく徒党への絶対命令である。はからずも、Brutus の懼れた Cæsarism は Cæsar のなかにではなく Brutus のなかに生きていたと言うべきであろう。いみじくも Fokes が述べるように “The conspirators stand up against the spirit of Caesar, which only find rest in their deaths, so that in a sense the death of Brutus and Cassius is the death of Cæsar also.”⁽⁹⁾ ということにもなる。

陰惨な image は劇中随所にみられるし、また先述した “alchemy” は明かに irony であるが、ここでは詩人の筆が描く巧妙な irony を一つあげておこらう。Brutus は妻 Portia に “I am not well in health” と仮病を用いて不安な心情をごまかすのだが、この時詩人の卓抜な筆は「病頭巾」を被る Ligarius を登場させる。彼は仮病を使い Brutus をして、「病気でなければいいんだが」と歎けさせる正真の病人である。そればかりか、この病人 “I have discard my sickness!” と叫んで「病頭巾」を捨て更に恐ろしい心の病——陰謀——を背負いこむ。そして、

Bru. A piece of work that will make sick men whole.

Lig. But are not some whole that we must make sick?

(II. i. 327-328)

という対話が、美事な irony となる。この場合 “sick” が不健康な精神を現すという事については詳述する必要はあるまい。

(3)

対話を演戯に結びつけたのは恐らく Aristoteles であろう。確かに甲乙の対話的対決は緊張を連続させる最も効果的な方法の一つである。Julius Cæsar で詩人の際立った才智の筆を示す恰好の例は三幕二場の Brutus と Antony の演説であろう。詩人の筆は散文で Brutus の演説を綴り、韻文で Antony のそれを描いている。「知に働けば角がたち、情に棹させば流るる」の譬え、この素晴らしい対

(9) R. A. Fokes: “An Approach to Julius Caesar”, *Sha. Quarterly* (1954), vol. 5, p. 263.

照の妙味に合の手をうつ民衆は無韻詩で伴奏を口吟む。緊迫した情景の劇的效果を昂めるのに充分、心憎いばかり巧緻な筆ではある。固唾を呑んで息を凝らしたであろう Globe 座の観客を容易に想像できよう。二人の演説を比較する時、頑迷な理想主義者 Brutus の像は一層明かになる。「雄弁家」として有名な Brutus は、

hear me for my
cause, and be silent, that you may hear: believe
me for mine honour, and have respect to mine
honour, that you may believe... (III. ii. 13-16)

と、冒頭から三段論法的論理を振りかざし、終始この姿勢を崩さず図式的論理を展開する。だから彼は、民衆の“wisdom”と“senses”⁽¹⁰⁾に訴えて公正な“judge”を求める。“as he was ambitious, I slew him”と Cæsar 殺害の理由を述べながらも、“ambition”の内容については一顧をも与えず抽象の域を彷徨する。“There is tears for his love; joy for his fortune; honour for his valour; and death for his ambition”とならべても、そこには自らの名句に陶醉して論理を弄ぶ一人の narcissist がいるだけである。だから、“Not that I loved Cæsar less, but that I loved Rome more”と殺害の動機を述べても、民衆に説く論理とはならず、自らに言い聞かせる恰好となり、民衆の反応を改めて“I pause for a reply”と求めなければならない。これに対して、“a plain blunt man”と自称する Antony は、終始民衆の“heart”に囁きかける。“wit”も“words”も“worth”も有たぬという彼にとって Brutus 的論理は無用のものでしかない。彼は一見何の変哲もない“Brutus says he was ambitious/And Brutus is an honourable man”と繰り返して言う。最初にこの言葉に接した民衆は、字句を率直に鵜呑みして静かに肯いたのではなかろうか。だが、民衆と苦勞を分け合った Cæsar がどうして野心家なのであろうか、と疑問を発しながら、再度この言葉が囁かれる時、民衆は仄かに漂う疑惑の臭気に戸迷い乍らこの言葉を咀嚼したのではあるまいか。困惑する民衆に追い討ちをかけるように、Antony は続けて言う、王冠を三度拒んだ Cæsar がどうして野心家であったらうかと。続いてこの呪文めいた言葉を三度囁く時、この言葉は新しい意義を携えて民衆の心に飛びこみ、動かし難い疑惑を育んだ筈である。Antony は声をつまらせ“I must pause

(10) Brutus はこの語を‘reason’の意味に用いている。Cf. A. Schmidt *Shakespeare Lexicon*

till it come back to me” と涙を流して、民衆の自然な反応を待つ。“heart” に訴えた Antony の手管は美事に功を奏し、民衆は積極的に自ら反応を示す。ついで Antony が語りかける時には疑惑は民衆の心を蔽い、Antony は演説者としてではなく民衆の一人となって彼等に話しかけ、民衆の好奇心を掻立て疑惑を呪いにまで昂めていく。臆て “Shall I descend? and will you give me leave?” となると、騒々しい「木石野郎」と呼ばれた民衆が積極的に動き始め、弁説者対聴取者の関係は次第に崩れて民衆がこの場面を支配していく。更に彼は Cæsar の無惨な死骸をみせて民衆に訴え、Cæsar の遺言状を読んで真相を告げる。疑惑を呪いに変え、呪いを暴動に仕立てるまでの Antony 手管は全く美事である。民衆の心に訴え情感を激しくゆり動かす Antony の巧妙な手管は、抽象的論理で民衆の知性に働きかける雄弁家 Brutus にはなかった。理智を過信した Brutus は、自らの理智によって墓穴を掘るという失態を演じるが、この Brutus の失態から理想主義者 Brutus の映像が看取できよう。Pompey の雄姿に惜しめない拍手を贈った民衆は、「Pompey の血族を滅して凱旋する」Cæsar をも心から歓迎し得る素朴な精神を有っていた。Marullus の苛酷な表現を用いるなら「残忍冷酷な素町人」とも言うべきこの民衆が、Brutus の演説の聴衆なのである。彼等は Brutus の雄弁が終わった時恐らく卒直に拍手を贈ったことであろう。がしかし、この拍手は演説内容の吟味理解に基づく賛同を意味するものではない。彼等が拍手を贈ったのは、そこに英雄 Cæsar を葬った新しい一人の英雄 Brutus の雄姿を見たからである。Brutus の演説が終わった時、民衆の一人が叫ぶ、

Let him be Cæsar (II. ii. 56)

何と不気味な irony であろう。

Brutus が演説を始める時、彼は “noble Brutus” と呼ばれた。そして演説が終わった時、彼は新しい英雄 “Cæsar” との敬称を受けた。だが、Antony の呪文にも似た演説が終ると “most noble” の敬称は、野心家であった筈の Cæsar と切々と哀悼の賦を綴る Antony に捧げられる。寸刻前 Brutus によせられた讃仰は呪いとなり、“traitor” “villain” “conspirator” と罵られ民衆の怒は燎原の炎のように舞い上る。“Mischief, thou art afoot,/Take thou what course thou wilt!” と Antony が一人微笑を洩らす時、Brutus は「狂人のように」ローマ城外へ逃亡しなければならない。「時代の矯正」と「自由」のために Cæsar を殺害した Brutus であったが、膺懲の剣と自由解放の旗幟は Antony に託されることとなる。動機の純潔が結果の純潔を齎すと信じた Brutus、Cæsar の殺害が

Cæsarism の倒壊を意味すると考えた Brutus, 自己の人格にかけて行為の正当性を立証し得ると考えた Brutus, 民衆の知性に訴えて公正な “judge” を期待した Brutus, すべてが Brutus の過失であって, それを悟らずに悲劇的運命を辿る Brutus は, 詩人の叡智が創りあげた理想主義者の肖像である。

(4)

朝に始って夕に終るこの劇は, 内乱の終焉で幕をあげ内乱の終焉で幕を閉じる。或る評家が述べるように, Appian の史書が詩人の眼にとまったとも臆測できようが, 恐らくは古代ローマ史を知る唯一の資料であったろう Plutarch から, 詩人が Gibbon の名著や現代の史家が提供してくれる共和制体を把握していたとは考えられない。

建国以来七代に亘る王の支配下にあったと言うローマ黎明期に纏る伝説の真偽は兎も角, 最初期のローマが祭祀・行政・軍事の三権を総轄する王政下にあったのは事実なのだが, ここでは Shakespeare が描いている共和制末期の Cæsar 時代に一瞥を加えてみよう。確かに Shakespeare が捉えたように, 先にも触れたが, Cæsar 登極の可能性は充分にあった。このような状勢の背後には, 崩壊した三頭政治の残骸と, 有名無実化した元老院の痛々しい姿がみられる。共和制の伝統である dictator の任期に一顧も与えぬ独裁者 Cæsar の権勢が馳て誕生するローマ帝政への精神的崩芽であるのは明かである。とすると, North を通して詩人が学んだローマは, 浅深の差はあるにせよ, 歴史的総体の把握という意味では大きな誤差は認められぬといえよう。尤も, 共和体制の帰結とも言える平等な市民の国政参加という現代民主政治は, ローマには存在しなかったと考えられるし, 詩人の脳裡にこの種の概念があったとは到底考えられぬから, 共和制といっても貴族寡頭政治の別名に他ならない。詩人にとって, 共和制という用語は勿論無縁なものではあるが, 共和制期のローマは描いている。すると, 彼は君主制に代置されそれを乗り越える秩序体系として共和制を観たのであろうか? North を手にした Shakespeare が観たのは, 興味ある古代ローマの世界であったろうか? 恐らくは, そこに現代の不安に通ずる世界を観たのではあるまいか。Hayward の筆禍を知り, Essex 伯陰謀の崩芽を認め得たであろう暗黒な時代への疑惑や不信が, ローマに藉口して現代を詠わしめる結果になったのではあるまいか。

(11) Cf. H. H. Furness; *op. cit.* pp. 294-295.

だが、詩人が serious なものとして捉えた現代への思惑は、君主制自体への否定意識とはとれない。まして、共和制への肯定的判断の結果ではない。寧ろ、素朴な秩序体系への密着と離反の軌跡と言うべきであろう。詩人がこの作品で展開する悲劇的世界の基底は、綿密な階層性の上になる例の秩序観であり⁽¹²⁾、そこで Brutus は動く。だから Brutus の原型を morality の主人公に求める評家の考察も決して突飛な発想ではあるまい。詩人はローマを脅かす Cæsarism に疑問を発し乍ら、それを越える新しい秩序体系を描こうとはしない。独裁政治の危険に始って、三頭共和政治の勝利に終るとみえるこの劇を、おぞましくも政治的イデオロギーの葛藤という一義的・皮相的解釈はできまい。Brutus と Cassius の死が新しい自由と解放を斉した訳ではない。二人に代って相反目する三人の野心家がいるに過ぎない。市民権を剥奪して元老院の長老を殺害する新しい権力者達は、Cæsar の高貴な遺産を掠め取る手段を考えねばならぬ。Lepidus とは、「財産を運んでくれれば不必要な驢馬」に過ぎないし、Antony と Octavius の「依倣地」は、天に架したつもりの権力の階段を駆け上る pierrot の醜態であろう。謙遜は若い野心の梯子で、頂上に達すると雲間を眺め低い階段を軽蔑するとは、Brutus が Cæsar によせた危惧なのだが、これは Cæsar が死に Brutus また死んだ後も生きている。Cæsarism を乗り越える新しい秩序体系は依然として不毛である。Brutus の思惑は、恐らく詩人が時代によせた思惑であろうし、心の指標を求めての彷徨が劇 *Julius Cæsar* の世界となったであろう。

(12) 最も参考になる書を一冊あげれば、E. M. W. Tillyard の名著 *Shakespeare's History Plays* であろう。